

妻見送った医師の苦悩

国立がんセンター・垣添名誉総長が著書

第一線のがん専門医が、最愛の妻を看取った。過去に何人も患者を見送り、家族を失う悲しみは理解していたつもりだった。だが、そのつらさは想像を超えていた。――。独り残された男性が「死ねないから生きている」どん底の日々から、生きる力を取り戻すまでの2年間を、国立がんセンター名誉総長の垣添忠生(68)が本につづった。

(岡崎明子)



海外からの友人を自宅でもてなした時の1コマ。垣添さん提供

2人が結婚したのは40年前。当時、研修医だった垣添さんが、患者として出会った昭子さんの賢明さにひかれ、12歳年上で既婚者の昭子さんと駆け落ちした。昭子さんは元々体が弱く、垣添さんは自然に家事を手伝ってきた。2人に子どもはおらず、休みにはカヌーや山登りを楽しみなが、いつも一緒に行動してきた。

昭子さんの肺に6、7ほどの小細胞がんが見つかったのは4年前。昭子さんはそれまでも、肺の腺がんや甲状腺がんを患ったが、治してきた。垣添さんは、今回のがんも治すつもりで最新治療を施した。だが、がんは転移。垣添さんが総長を定年退職し、ようやく夫婦2人でゆっくり過ごそうと考えていた矢先だった。

1年以上にわたる闘病の末、国立がんセンター中央病院(東京都中央区)に入院した昭子さんの願いは「家で死にたい」だった。07年末、最後の外泊の4日目となる大みそかの夜に、78歳の生涯を閉

じた。昭子さんの望みで、亡くなったことは誰にも知らせず、正月三日はひつぎの中の顔を眺めて過ごした。葬儀は弟夫婦と3人で執り行った。

遺影前でひとり酒

正月休みが明けても、親しい人以外に妻の死は知らせず、日中は従来通り公務をこなした。だが夜、誰もいない自宅に帰ると、遺影を前に酒を飲む日々が続いた。

「いつも2人で生きてきた。片割れを失い、何のために生きているのかと考える日々でした」。悲しみは深く、底無しに思えた。食欲を失い、睡眠剤で眠った。遺族の深い悲しみ(グリーフ)をいやすケアの存在も知っていたが、受けようという気にならなかった。

しかし3カ月が過ぎたころから、心境に少しずつ変化が出てきた。「いつまでも悲しんでいては、妻も悲しいのではないか」。酒浸りの日々を見直そうと、日曜日には1週

間分のサケやたらこを焼き、お茶漬けにして食べるようにした。毎晩腹筋や背筋で体を鍛え、新たに居合も始めた。

ただ、悲しみは消えることは無いという。「今でも毎日、何百回も妻のことを思い出します」。山登り中にウサギや鳥に励まされると、「妻が見守ってくれる」と感じるという。「単なる自然現象だとわかってはいます。でも非科学的だけど、そういうこともあると思うんです」

悲しみケア研究へ

がんで亡くなる人は、年間34万人に上る。自身の体験を通じて、悲嘆にくれる患者に医療者がどのように接していくべきか、グリーフケアの研究を始めることにした。

「最愛の人を亡くし途方にくれている人に、私の苦しかった思いや生きていく上での工夫が、少しでも手助けになればと思います」。著書「妻を看取る日」は新潮社から出版。1365円。